

ローターを入れたまま戦うFate/stay night

エロスはせがわ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『ローターを入れてても——間違いなんかじゃないんだから!』

タイトルからも分かる通り、最低の話です。

ただこのタイトルを見てクリックした猛者であれば、大丈夫なんじゃないかな? と思います。

一応はR15のKENZENな作品ですので、安心してお読みください。おそらく短編になる予定です。

とりあえず、一言だけ言わせて下さい。

遠坂凜「なに考えてんのがよ変態! えっち!」

目次

入れたまま、運命の夜。	1
入れたまま、教会へ。	8
入れたまま、墓地へ。	15
入れたまま、校庭へ。	21
入れたまま、朝。	24
入れたまま、説教。	33

入れたまま、運命の夜。

「おっ……！ お前がもしかしたら、七人目だったのかもな。

ま、まあだとしても、これで終わりなんだががが」

月明りに照らされた、薄暗い蔵の中で、士郎はその言葉を聞く。

なんか目の前の青タイツの男は、ブルブルと身体を震わせているような気がする。いったいどうしたんだろう？

「こ、言峰の野郎……！ よりにもよって『強』にしゃがって……！

さっさと終わらせて帰らねえと、もうどうにかなっちまうっ!!

……じ、じゃあな坊主。今度は迷うなヨヨヨ」

そこはかたなく中腰で、まるでお尻を庇うような姿勢のまま、青タイツの男が槍を構える。

目撃者を消す為。衛宮士郎の命を奪う為に。

なんかプルプルと震えながら、槍の穂先を心臓の位置に添えた。

(ふざけるな！ まだ俺は死ぬわけにはいかない！)

—— お前なんかに殺されてやるものか!)

今まさに男の槍が、心臓を貫かんとした……その時。

まるで士郎の強い想いに呼応したかのように、辺り一帯が眩い光に包まれる。

足元に描かれていた魔法陣が光を放ち、荒れ狂うような強風を発生させる。

「マジかよ!? まさか本当に七人目か!?

俺あいま、それどころじゃねえつてのにツ!!」

なんかもものっすごく焦った声を出して、青い男が蔵の外へ飛び出す。(お尻を押えながら)

そして、その背中を追うようにして、魔法陣から飛び出す影があった。

「ま……待ちなさい！ ホントに待って下さい！

こんなの歩けるワケが無い！ 戦えるワケが無いじゃないですか！」

でもその人物は、なにやらギョツとスカートの前を押え、前かがみだ。

なんとかヨタヨタと歩いてはいるものの、その歩みは牛歩の如く。そして物凄く内股になっている。

「……………くっ！ くうッ！」

待つて下さいランサー！ 遠くへ行かないで下さい！ いま私は動けないのです！」

「うるせえバカ野郎！ そんな俺だつてそうだッ！ 泣き言いつてんじやねえ！」

あわわわ……………！ と手を前に出し、必死で追いつがる。

だがランサーのいる場所は、ここからまだ20メートルも先。

突然この場に現れた白銀の少女は、もう泣きそうな顔で足をガクガクと震わせている。

いったいどうしたのだろうか？

「し、仕方ない……………！ ランサーを追う前に、先に挨拶を済ませておきましょう！」

——問おう。貴方が私の……………ご主人様か？」

「……………」

少女はプルプルと震え、顔を真っ赤にしながら士郎へと向き直る。

そして頑張つて真っすぐに立ち、まるで気力を振り絞るようにして言い放った。

きつと彼女の心境としては、（ここは大事な所だ！ しっかり挨拶だけはしなければ！）という感じに違いない。

たとえ今、自分が立っている事もおぼつかない状態だとしてもだ。流石は騎士王である。

「えつと……………君は？」

士郎は呆けた声。いま目の前にいる、滝のような汗を流す少女を、ただ見つめるばかり。

しかし、その時士郎の手にあつた令呪が赤く発光し、ズキリと痛みを発する。

思わずうめき声をあげる士郎。だがその様子を確認した白銀の少

女は、何かを確信したようにコクリと頷いた。

「サーヴァントセイバー。しよ、召喚に従い参上しました。

ここ、ここに契約は完了した——

これより先、貴方の命運は私と共にあり、我が剣は貴方と共にあるう〜?!?!」

とても大事なシーンだが、途中ニワトリみたいに「ココココ！」しかも語尾が「あるう〜→」みたいになっている。

本当にこの子はどうしたのだろうか？ 何かあったのだろうか？

「〜ツツ?!」で、では主従の証として、貴方にはこれを持っていて貰いたい……」

セイバーと名乗った少女は、とてもゆっくりチョコチョコ歩いて、士郎の目の前にやってくる。

物凄く内股で。モジモジと上目遣いで。

「良いですかマスター？ これは此度の聖杯戦争において、令呪と同じくらい大切な物。

決して失くす事無く、肌身離さず持つていて下さい。……本当にお願ひします」

そして少女は、小さな機械のような物を手渡す。

タバコの箱くらいの大きさで、四角くてピンク色。なにやらボタンのような物がたくさん付いている。

「えっ、なんだコレ？ 何かの装置なのか？」

「そうですマスターご主人様。くれぐれも乱暴に扱わぬよう、願ひします」
機械いじりが趣味の士郎だが、こんなの今まで見た事が無い。

とりあえずは受け取り、マジマジと観察してみるが、それが何なのかは全然分らない。

解析魔術の使い手である士郎だが、それが「どこかに電波を飛ばして何かを作動させる為の機械」だという事しか分からなかった。

あとはそれがとても高性能で、きつと何キロも離れた場所からでも、しっかり動作する優れモノであるという事くらいだ。

「何に使うんだコレ？ ……とりあえずは、ポチッと」

『——ひゃああああああんつつつ?!?!?!』

その途端！ 少女がとんでもない大声をあげる！

目を見開き、腰が砕けたように崩れ落ちて、ギョ〜つとスカートの前を押えている。

「まー マスター！ マスターマスターマスター!!」

そのボタンは“強”です！ 押したらダメなのですつ！ ん
いいい〜つ!!」

「えっ?! えっ?!」

少女の尋常じゃない様子に、オロオロとうろたえる士郎。

「そつ……! そそそつ!! それはあく!!」

宝具を使用する時にい！ 頑張る時に押すための物でえ〜つ!

今は押しはいけないのですううう！ ああーん!!」

「えっ。えっ」

少女はへガクガクガク〜つと身体を震わせて懇願する。お願い
許してと、必死に叫ぶ。

士郎は慌てて機械を構え、「あわわ!」とうろたえる。

「ごめんセイバー! えつと! ……これかな?」

そしてポチツと違うボタンを押した瞬間、またこの場に艶声が響
く。

『うにゃああああーん!!』

まつ! マスター! マスタあく!!』

「うわあああ! ごめんセイバー! ごめん!」

そっちは令呪を使う時のボタンです! とびきり頑張る時に押す
ヤツです!

そう必死こいて説明するセイバーの様子に、士郎はもう大慌てであ
る。

「こつ、これか? これか?」(ポチポチポチ)

『あーん!! ああああーん!!』

シロウツ! しろおおー! うにゆ〜ん!』

それは呼びつける時のヤツ! それ傷を治す時のヤツ! 身体強
化のヤツ!

セイバーは矢次に説明していくが、なかなか正解のボタンが見つか

らない。

どれを押せば良いのか、まったく分からない！

『——えええエクスカリバアアーツ♡♡♡ (意味深)』

その時！ 少女がバターンと後ろにひっくり返る！

まるで雷に打たれたように！ 「あーん！」と声をあげて倒れ込んでしまう！

いったい何があつたのだろうか?!

「せ、セイバー?! どうしたんだよセイバー?!」

「あ……あああ……シロウ (はあと)」

海老のようにピンと反り返り、ただただ恍惚の表情を浮かべるセイバー。士郎は慌てて抱き起すけれど、彼女はもうまともに話が出る状態では無い。

士郎にギョツとしがみつき、ハアハア甘い吐息を漏らすのみだ。

ちなみにさつき外の方から、あの青い男の物であろう「うわーん！」という叫びも聞こえた。偶然にもセイバーと同じタイミングで、その身になにやらあつた事が伺える。

それが何なのかは、分からないけれど。

「いけないっ！ 今とても身体が敏感につ……!」

離れて下さいマスター！ ドンタツチミーです!」

「うわあぐめん！ 俺そんなつもりじゃ?!」

と、とにかくボタンを！ うおおおポチポチポチ!」

『いやあ————っつ!!』

いつ！ いまイツ……! ウッ イツてましゅからあく!

今はふぎいくん☆☆☆☆』

——何だこれは?! いったい何が起こっているんだ?!

——これは一体なんの為のボタンなんだ?!

だがいくら押してみても、士郎には分からない。

このピンク色の、ちやちなオモチャのような機械はいったい何なのだろう?

いったい今、セイバーの身に何が起きているのだろうか？ 彼は知る由も無い。

その後、とりあえず士郎はポチポチとボタンを押し続け、セイバーを助けてやるべく懸命に努力する。

だが何をやってもセイバーは「きゆううん！」とか「ああああん！」とか言うばかり。約1時間ほどボタンを押し続けたが、成果は芳しく無かった。

最終的に彼女は「ぐったり！」と倒れ伏し、そのまま気を失ってしまふ。

なにやらリンゴのように頬を赤く染め、どこか幸せそうに、そして満足気に眠る彼女。

その様子を見ても、士郎には分からない—— いったいこの子の身に何が起きているんだ。

未だ少年の域を出ない士郎には、皆目見当が付かないのであった。試しに眠っているセイバーに向けて、何度かポチポチとボタンを押してみたのだが、彼女はその度にピクピクと身体を振るわせ、甘い吐息を漏らすばかり。

寝言のように「ますたあ♡ ますたあ♡」と呟く声は愛らしかったが、どうやら彼女を救ってやる事は出来なかったようだ。

ちなみに後で確認してみると、表に居たはずのランサーは既に姿を消しており、どこにも姿は見当たらなかった。

きつとセイバーと同じく気を失って、言峰あたりが連れて帰ったんだろうと思う。

とりあえず士郎は己の不甲斐なさを感じ、またじつくり機械を研究するように、ひたすらボタンを押し続けるのだった。

—— 聖杯戦争。それは七騎のサーヴァントとマスター達による、命懸けのバトルロワイヤル。

まあ今回の第五次聖杯戦争に限って言えば、なにやらサーヴァント

達の身体には「特殊な道具」が装着した上でおこなわれているようなのだが……それがいったいどのような物なのかは、まだ未熟な魔術師である士郎には知る由も無い。

そして士郎が知らない以上————私たちに分かるはずも無い。イキ残るのはいったい誰なのか？

この戦いに、この行為に、いったい何の意味があるのか？ どういう趣旨なのか？

ふと手元の機械を観察してみると、そこにあるのは「ビッグバンなんたら」という謎の文字。

【通常の86倍の……】とも書かれている。

「しゅごおい……☆ これしゅごいすうシロウ♡」

その言葉の意味も、よく分からないまま。

士郎の戦いの火蓋は今、切って落とされたのだ——

入れたまま、教会へ。

「はい♪ それじゃあいくよライダー？ えーい！」

『——うにやああああ〜っつ!!』

深夜の間桐家の一室に、ライダーの艶声が響き渡った。

「うふふ♪ じゃあ次はこのボタンいくね？ えーい！」

「あーっ!! サクラあー！ さ〜くらああーっ!!」

エビ反りになり、「うわーん！」と泣き叫ぶライダー。対して桜は満面の笑みだ。もうニッコニコである。

「や、やめて下さいサクラ！ もうゆるしてッ！」

「えっ？ ダメだよライダー。今日はたくさん訓練するって言ったでしょう？」

「そうじゃないと聖杯戦争に勝てないもん。あそーれ♪」

「あーん！ いやあああーん!!」

豊かな胸の谷間。大きく露出したふともも。そこはかたなくエロい眼帯。

それに加えて、この喘ぎ声ときたもんだ！ それはもう、色々えらい事になっているのだ！

ちなみにこの行為は、【間桐式の訓練】である。桜が持っている機械は間桐家が開発した、れっきとした聖杯戦争用のマジックアイテムなのだ。

決していかかわしい物では無いと思うので、どうか安心して欲しい。きつと大丈夫だ。

「ら、らめれすうサクラあー！ これ以上はあー！」

もう私、おかしくなっちゃいますう！ イッゴッアッー！」

「そんな事ないよライダー？ 人間ってとつても強いんだから♪」

ダメだと思っても、意外と限界って遠くにあるものなんだよ？

それにライダーはサーヴァントなんだから！ きつとだいじょうぶ！

それじゃあ、もういつかいねライダー♪ えーい☆」

『——んオウツ?!?! りや……りやめええ!』

しゃくらあ! しゃ……しゃくしゃく! うぐぐぐひひ』
舌を出してへびクビクビ〜と震えるライダー。床にペタンと女の子座りし、ギューっとスカートの前を押えている。

その身体は、桜がポチポチとボタンを押し込む度に、跳ねるように痙攣する。

——いったい彼女の身に、何が起こっているのだろうか?! 謎だ。

「……」

そしてこの部屋の片隅には、嬉しそうに「きやつきゃ☆」と笑う桜を見守る、間桐慎二の姿もあった。

彼はどこか「どよーん」とした顔をしており、この世界に来てまで不憫な目にあっているライダーに、とても同情している様子が見取れる。

なんだアレは? コレが魔術師のする事なのか?

そう言いたげな顔だが、口に出す事は出来ない。なぜなら自分はさつき、桜や間桐臓硯に「僕は関わらないよ」と伝えただけ。

この聖杯戦争に、自分は一切干渉しないと、そう宣言したのだから。

(やっぱ、思ってたのと違うんだよな……魔術師ってさ)

慎二は過去に魔術師という物に憧れ、書齋で魔術に関する本を読み漁ったり、個人的に勉強していた時期がある。

後々に、自分にはまったく魔術回路がない事が判明し、その勉強が無駄になってしまったのには落ち込みはしたが、今となっては過去の話。

ぶつちやけた話、無くて良かったなあ僕、なんて事を想ったりもする。たとえ自分が本来は、間桐の当主となるべき人間だったとしてもだ。

(だつてさ? あんな事したくないよ僕……)

それいったい、何の意味があるの?)

——思ってたのと違う。慎二の想いはその一言に尽きる。

もつとこう……手から炎を出したり、空から雷を落としたり、そう

というのが彼の持っていた魔術のイメージだ。

とても強くて、カッコよくて、何でも出来るような。いわばそんな
“特別な力”こそ、慎二の憧れた物だった。

『おひいッ?! ……と、トロけるッ☆ トロけちゃううん♡』

「あはは♪ じゃあもつといくよおライダー！ よいしょ♪」

……けれど蓋を開けてみれば、間桐の魔術にそんな物、一切なかったのだ。

あるとしたらこのワケの分からないピンク色の機械（一応マジックアイテムらしい）を使い、対象の身体能力を強化したり、魔力を底上げしたり、また無理やり言う事を聞かせたりするような物ばかり。

それだって凄い魔術には変わりないんだろうが……でもやっている事といえば、いま見ている通りの物。

ライダーは今も色っぽい声を出し、「ハオオッ！」とか「へひーん！」とか叫んでいるのだ。

それは慎二にとって全然カッコよく無いのはもちろんの事、なんか見ている可哀想になってくる。そんな事を進んでやりたいなんて、思わないのだ。

（えっちな服を着てはいるけど、あの人って有名な英霊なんですよ？

そんな事しちゃって良いの？ 失礼じゃない？）

そもそもあのピンクの機械に、本当にそんな力があるのだろうか？

聞いた所によれば、「特殊な刺激を与える事により、対象の能力を引き出す」という効果があるらしいのだが……多少なりとも魔術の知識をかじった慎二にとって、それには疑問を感じざるを得ない。

本当にあんな物に、そんな効果があるのか。ハッキリ言っただけだと思っただけだ。

（あれだ、馬鹿と天才って紙一重って言うじゃない？

僕のご先祖さまって、頭は良かったんだろうけど……かなりバカだったんじゃないかな？）

今も眼前には、嬉しそうな顔の桜、そして「きゆううん！」とか言っただけにスカートの前を押えているライダーの姿がある。

ほれ見ろ、何が身体強化だ。何が魔力の底上げだ。

ライダーは身体をガクガク震わせるばかりで、
一歩も動けないじゃないか。

(あんなのでどうやって戦うんだよ。何も出来やしないじゃないか
……)

いま目の前にある「らめええ！」みたいな光景に、慎二は自分の考
えが間違っていない事を確信する。

やっぱり僕のご先祖様や御三家って、馬鹿ばかりだったんじゃない
いだろうか。

(あ、でもアレかなあ。

ライダーだけじゃなく、これって7騎のサーヴァント全員が付ける
んだよね？

…… ならば条件は同じって事？

酷いレベルでバランスが取れてるって事なのか？)

ふと慎二の脳裏に、伝説と謳われる偉大な英霊たちが、なんか腰を
ガクガクさせながら武器を構えて向かい合っている姿が、思い浮か
ぶ。

(でも条件が同じなら、最初から何も付けなくて良いじゃん。無くて
も一緒じゃん)

慎二的にはそんな風に思うのだが、昔の人の考えなんて、自分には
分からない。

きっと現代人には思いもよらぬ、深い理由があるのかもしれない
し。

無いかもしれないケド。

「ほらライダー！ 桜じゃなくて、ご主人様マスターって言うてごらん？
ちゃんと言えたら、ご褒美をあげるよ♪」

『サーイエッサー!!』

ご主人様マスター！ どうかいやしい私めに、お情けを下さいまし！

——んほおおお!! ブレイカー・ゴルゴオオーん☆☆☆ (意
味深)

オーイエスッ！ オーイエスッ！ わおくん♡』

ビクビクビクーつと痙攣し、ライダーが恍惚の表情で、後ろにひっくり返る。

その後は「ああ……ああ……♪」と呟きながら、どこを見るでもなくポーつと呆けている。

ちなみに桜は「ほっこり☆」とした顔。輝くような満面の笑み。

——馬鹿じゃないの？ 魔術師ってみんな、馬鹿なんじゃないの？

とりあえず慎二は用意してあったポカリスエットを手に取り、タオールと一緒にライダーへ手渡してやる。

なにで汚れたとは言わないけれど、後で床も拭かなきゃいけない。

「きゃいーんっ☆☆☆

い、今は触れないで下さいシンジ！ ドンタッチミーです！ えっち！」

「あつ、ごめん。……つか大丈夫かよライダー……」

……

……

そして、ところ変わって深夜の衛宮家。

いま士郎は出かける準備を済ませ、先ほど目を覚ましたセイバーと共に、玄関の戸をくぐった所だ。

実は先ほど、突然この家に遠坂凜が押しかけて来て、軽く士郎に聖杯戦争のレクチャーをしてくれるという出来事があった。

あの時の遠坂の傍には、そこはかたなくお尻を庇うようにして立つ、赤い服のお兄さんがいた。

あの人が誰だったのかは分からないし、彼には口を開く余裕すら無かったのか、一言も会話を交わす事は出来なかったけれど……。

でも機会があれば、また会う事もあるだろうと、士郎は気にする事

なく、二人と別れたのだった。

そして彼女によると、詳しい話が聞きたければ、マスター登録がてら直接教会へ赴いた方が良いとの事。

その助言に従って、今は出かける最中であるのだ。

ちなみに遠坂が教会までついて来てくれなかったのは、その赤い服のお兄さんの体調を気遣ったの事だ。

『アーチャーのお尻が限界だから、今日は帰って休ませるわ』と、なんかそんな風な事を言っていたように思う。

「し……シロウ？」

申し訳ないのですが、どうか出来るだけ、ゆっくり歩いて頂きますか……？」

額に冷や汗を浮かべるセイバーが、ちよこちよこと内股で歩いて来て、ギョツと士郎の腕にしがみつく。

どうやらセイバーは、ひとりで歩けないようだ。こうして士郎にしがみつかなければ立ってられない程、足がガクガクと震えている。

不安げな顔、震える声。まるで小動物のような仕草。

彼女は心から士郎を頼りにするように、彼の腕をギョツと抱きしめる。その姿はとてもか弱く、この上なく愛らしく見える。

「それじゃあ行こうかセイバー。

ほら、いっちに。いっちに」

「いっちに……いっちに……」

はい、何とか歩けそうです。道中よろしくお願いします、ご主人様……」

二人でよちよち、よちよちと歩く。

一歩一歩を確かめるように、しっかりと教会までの歩みを進めていく。

そうしないと、この幸福感とドキドキで、腰が砕けてしまいそうだから——

「うう……歩く度に刺激が。

不甲斐ない従者で申し訳ありません……」

「大丈夫だセイバー、俺が付いてるよ。」

ちやんとこの機械も忘れず持って来たし……ってごめん！ 押し
ちまった！」

「あー……ん☆ ……し、シロウっ!?! ここは野外ですよ?!

人に見られてしまシロウウウ……ん♡♡♡」

その後も「ふぎいーん！」とか「エクスカリバー！」とか言いつつ、
二人はなんとか教会にたどり着いた。

入れたまま、墓地へ。

「よろこべ少年——お前の願いはようやく叶う」(リモコンを指しつつ)

何の願いだよ。そんな性癖ないよ。

士郎がそう思ったのかどうかは、定かではないが……とりあえず彼は言峰神父の話を全て聞き終わり、教会の外へ出た。

なんだか来てはみたものの、正直自分にはチンプンカンプンな話だった。

この機械がどういった物なのかも、言峰神父に説明を受けても、よく理解出来なかった。知らない言葉も沢山あったし。

「確かオルガス……だったか？　あとボルチなんとかって。

なんかカツコよさげな言葉だな。帰ったら遠坂に訊いてみよ」

きつとこれは、自分がまだ魔術師として未熟者なせいなんだろう。純粋な良い子である士郎は、素直にそう思うのだった。

とりあえずはこの聖杯戦争が、下手すると冬木の住民に被害が出る可能性がある代物だという事。(それがどんな被害かは知らないが)

そしてこの聖杯という物は、相棒であるセイバーにとって是が非でも必要で、必ず勝たなければならぬ事だけは、理解したけれど。

士郎にとってセイバーは、命を救ってくれた恩人である。そしてそれ以上に、掛け値なしに力を貸してやりたいと思える、大切な女の子。

だから士郎は出来る限り、彼女に協力してあげたいと思うのだ。「そーいや、この機械の使い方も教えてもらったな……」

たしか使い手の想いが、強ければ強いほど、ボタンを押した時の効果が高くなるんだったか。

魔力を込めるのと同じような感じなのかな？」

そうして歩くうち、表で待っていてくれたセイバーの所へたどり着く。

彼女は地べたにペタンと女の子座りしており、別れた前とまったく同じ姿。ただじつと何かに耐えるようにして、士郎を待っていてい

た。

まあひとりで立てないだけかもしれないが。

.....

「こんにちは——おにいちゃん」

その少女と出会ったのは、士郎たちが歩き出してから、すぐの事。ここは教会から少し離れた場所にある、冬木市の墓地の辺りだ。

「切嗣、もう亡くなったんだってね……。」

ほんと遅れちゃったけど、お悔やみ申し上げます」

「え？ あ……どうもご丁寧に」

白い髪の少女はペコリと頭を下げて、士郎に礼を示した。

いわゆる“沈痛な面持ち”という顔で、若くして親を亡くしてしまった士郎を、心から不憫に想ってくれている事が分かる。

「そりや切嗣が、私たちを残して日本に住むーって言った時は、腹が立っただけだね？

でも私にはお母さまがいてくれて、ずっと愛情を注いでくれてたし。

切嗣だって、たまにはこっちに帰って来てくれたわ。

……あの第四次の被害で親を亡くし、切嗣まで失った貴方の方が、よっぽどつらい。

それにある意味、これは私たち魔術師の責任だもの。

御三家の一人として。聖杯に関わる者として」

「？」

「そもそも、悪いのはアインツベルンなのよ。

切嗣が貴方を引き取るのを了承したら、二人ともこっちで一緒に住めたんだし。

しかもあの腐れアハト！ それで無理やり離婚みたいにさせたのよ?! 信じられない！

ごめんねおにいちゃん……許してね」

なにやら士郎には分からない話をする、見知らぬ愛らしい少女。だが彼女が真剣な面持ちで、誠意をもって語り掛けてくれているのが分かる。

「あ、セイバーも久しぶりー♪」

「前は残念だったよねっ！　今回はがんばるのよ！」

「あ、はい。……お久しぶりですイリヤスフィール……」

「あと一息だったのに、勝たせてあげられなかったって、切嗣いってたわ。」

相反する考えだし、決して仲良しじゃなかったけど、それでも貴方に申し訳ないって、ほんとは悔やんでたの。……許してあげてね？」

「いえ……気にしていません。私が不甲斐なかったのだから。」

お氣遣いありがとうございます、イリヤスフィール。

再び会う事が出来て、私は嬉しい」

士郎にしがみつき、足をへガクガクツ！〜とさせながらも、セイバーは優しい声色で少女と語り合う。

士郎は知る由もないが、どうやら二人は知り合いであるようだ。

いまイリヤに「お母さまは元氣してるよ！　写真みる？」と、ケータイの画面を見せて貰っている。

「今回はいけそう？　なんとってセイバーは二回目なんだし！　もう慣れた？」

「いえ……それが以前の物とは、比べ物にならない程の強さなのです。もう立っている事すらままならない。気を抜くと腰が砕けそう

だッ……！

なんでも前回の「86倍」なのだとか……」

「うわ〜！　ご愁傷さまっ！　がんばってねセイバー♪」

「そ、そんな!?　貴方からも御三家に言っ下さいっ！」

「これではとても……戦いどころでは……！」

「うーんとね？　『前回の戦いでは被害が大きすぎたから、今回はめっちゃめっちゃ強くしてみた』って間桐は言っただよ？」

きつと不要な大暴れして建物を壊さないように、そのくらいの強さにしたんじゃないかしら？

周囲への被害を鑑みての事だと思うわ！」

「なんとツ!?!」

セイバーは「ガン！」という顔。イリヤは楽しそうだが。

「まあ今回は私のバーサーカーもいるし、勝つのは大変かもだけど……。」

でも私おうえんしてあげるっ！ 優勝できるといいね！」

「は、はあ……。」

「ぶっちゃけ私、もう聖杯なんていーじゃん……、とか思うんだけどね？」

どーせ昔のアインツベルンも、飼ってたハムスター死んじゃったーとかで、第三魔法を目指してたんでしょ？ いい加減あきらめれば良いと思うの！

何年ひきずつてんのよバカ！ 新しいの飼いなさいよ！ 命はひとつなのよ!！」

「……。」

凄まじいまでのキャラ崩壊に言葉に詰まるセイバーを余所に、イリヤがニツコリした顔で士郎に向き直った。

二人で話し込んでいちゃってゴメンねと、可愛く「てへぺろ」する。

「それじゃあおにいちゃん、記念すべき聖杯戦争の初戦として、私と戦ってみる？」

もうセイバーとも、なかよしみたいたし。きっと良い勝負ができると思うわ！

——つてことで！ バーサーカー!!」

イリヤの呼びかけと共に、この場に鉛色をした見上げるような大男が姿を現す。

全身から噴き出す熱。獣のような低い唸り声。圧倒的な威圧感。

士郎はその全てに圧倒され、思わずひっくり返りそうになる。腕にしがみついているセイバーと一緒に。

「これがアインツベルンの最終兵器！ 大英雄ヘラクレスよ！」

どうおにいちゃん、カッコいいでしょ？ すごく強そうでしょ？」
イリヤはキラキラした目で問いかけてくるが、士郎は今それどころ

では無い。セイバーと一緒に「あわわ！」とバランスをとるのに必死だ。

しかしながら士郎は、いま目の前にいる巨人ともいうべき大男の姿に、ある違和感を見つける。

「えつと、イリヤ？ その人が胸に付けてるのって何だ？

……なんかブラジャーみたいに見えるんだけど」

そう。この大男は、胸元に何かを装着しているのだ。

ヘラクレスは確か神話の時代に出てくるような人物だから、古代の戦士であれば、上半身は裸というイメージがある。

そもそも男の人は、ブラジャーなんかしたりしない。

「ああこれ？ これは大胸筋矯正サポーターだよ！ ブラジじゃないよーう！」

いま目の前にいる、ブラをして仁王立ちしている大男。

見方によっては、とても男らしく見えない事も無い。堂々としていうという意味で。

「と言いたい所なんだけどね？ これは例の道具よ！

セイバーもつけてるヤツを、バーサーカーは身体中にいっぱい装着してるの！

あれはその、大胸筋バージョンねっ」

よくよく観察すると、バーサーカーの大胸筋からへブウウウンと音が鳴っている事が分かる。

いったい何の音なんだろうか？

「えつとおく？ 両胸でしょく？ 脇でしょく？ お尻でしょく？

あと思いつく限りの場所に、バーサーカーは例の道具をつけてるの

！

その数なんと——12個！！

これはバーサーカーの伝承にある12ゴッド・ハンドの試練にあやかっているわ
！」

今まで気が付かなかったが、耳を澄ませばもう煩いくらいに、バーサーカーからブウウウンと聞こえている。よく見ればバーサーカーの身体全体も小刻みに振動しているし。

「さあいくわよおにいちちゃん！ 聖杯戦争開始よ！

—— 狂いなさい！ バーサーカーツ！！」

その声と共に、イリヤが手元のスイッチを「えーい！」と押し込む。それもひとつじゃなく、12個いつぺんに押し込む！

その途端—— 獣があげるような「■■■■ーッツ！！」という凄まじい雄たけびが、この場に響き渡った！

「え、うそっ!? うそでしょバーサーカー?! バーサーカーツ!!」

そして……当然の事ではあるが、その途端バーサーカーはへピーン！〜とエビ反りになり、白目を剥いて後ろにひっくり返る。

そして、そのまま気絶したようだった。

「うそよ！ バーサーカーは世界でいちばん強いのよ！

たつてよバーサーカー！ たつてよお!!

……あ、この「たつて」っていうのは、普通に起立して下さいって意味だからね？

変なこと想像しちゃダメだよ？ おにいちちゃんのえっち」

イリヤの悲痛な叫びが響く中、士郎とセイバーはただ茫然とその姿を見守る。

—— 戦いは終わった。士郎とセイバーは、見事に初戦を勝利で飾ったのだ。

「うわーん！ たつてよバーサーカー！

えーい！ えーい！（ポチポチポチ）」

涙ながらにボタンを押す度に、イリヤの大事なサーヴァントは、ビクンビクンと痙攣する。

イリヤが身体をペシペシするたび「■■■■ツ！」みたいな声でドンタツチミー！ ドンタツチミー！ と叫ぶ。

やがてバーサーカーは完全に沈黙し、口からブクブク泡を吹き始めるのだった。

入れたまま、校庭へ。

あの夜の事を、憶えている。

初めてサーヴァントの戦いという物を目にし、その異様さの前に、必死に逃げ出した日の事を。

家の蔵でセイバーと出会う、数時間前の事だ。

『ちよ……い！ テメエそんな早く動くなよ！』

ゆっくりだろうがゆっくり！ さっき約束したろうがよッ！』

もう夜も更けてきた、深夜の校舎。

その日、慎二とのジャンケンに負けた事によって、弓道場の掃除を引き受けていた士郎は、帰宅中にその声を耳にした。

大の男が情けない声を出し、なにやら罵り合っているような声が、校庭の方から聞こえたのだ。

『遠くに行くくんじゃねえよ！ あんま離れんなよ！ 槍が届かねえだろうがっ！』

おめえは良いよ?! アーチャーだもんな！ そらあ遠くから攻撃できるだろうよ！』

……でも俺あ何も出来ねえんだよッ！』

『黙れクー・フリーン！ 悔しかったら、ここまで歩いて来たまえ！』

それに君には、高く飛び上がって槍を投げつける、という技もあるだろう！』

『——ジャンプなんざ出来るかあああッッ!!!』

俺あ今、立ってるだけで精一杯だよ！ ご覧の有り様だよ！

……どうすんだよ!? ジャンプした途端に、なんか出ちまったらあーッ!!

今まで必死に堪えてたヤツが全部でちまったら、どう責任とつてくれんだよッ!!

『ふふ。言うなれば君の中のクランの猛犬が、暴れ出すというワケか。

ジャンプした途端、檻を破って外に飛び出すかもしれんと』

『やかましいんだよ!!』

いいからさっさとこつち来いってんだよ! 鬼かテメエ!』

ふと目をやれば、そこには大の男二人が、お尻を押えて必死にチョココ動ココき回っている光景。

———何なんだコレは、と士郎は思った。

『ちよつと……! お願いだから二人とも、大声ださないでよつ……!』

もしこんな所を誰かに見られたら、生きていけなくなっちゃう!』
そして傍には、学校いちの美人と名高き女の子、遠坂凜の姿。

いま彼女はオロオロとうろたえ、必死に男達を諫めているようだ。

『プルプル震える男達を、リモコン片手に見てる女なんて、どう考えても変態じゃない!』

そういうのが趣味の人みたいじゃないの! 女王様か私は!』

『さあ指示をマスターご主人様! 私の戦いは君の為にあるぞ!』

『おうそうだ! なんなりと命令してやれ嬢ちゃん!』

いまアーチャーはお前の為に戦ってんだ! ケツ押えながらよお!』

『やめてよそういうの!! これ私がやらせてるみたいに言わないでよ!』

痙攣したり、エビ反りになったりしながら、必死にケツを押えて動き回るサーヴァント達。その光景を憧れのマドンナである遠坂凜が見守っている。

———なんだこれは。いったい何が起こってるんだ。

士郎は思った。

『……あつ! 誰が見てやがんどオイ!』

『なにっ?! 捕まえろ凜! 生きてここから出すな!』

『えっ、ほんとに?! ……どこ? どこにいるのよアーチャー?!』

———こんな見られたらもう、殺すしかないじゃないの!!!!

どこなのよおアーチャーッ!』

その後、お尻を押えながらチョコチョコ歩いてくるサーヴァント達の追撃を振り切り、衛宮士郎は家まで帰って来た。

後に聞く所によれば、もし士郎が聖杯に選ばれたマスターじゃなかったら、凜は確実に士郎のことを殺していたのだそうだ。

魔術で記憶を消すという手もあるが、もし万が一にでも思い出されたら拙いので、確実に息の根を止めていたと遠坂は語る。

魔術の隠匿、自らの平穩——そして大切な乙女の矜持の為に。

『私ね？ たまに魔術師って物が、よく分からなくなる事があるの。』

……なんで私たちは、こんな事してるんだらうって。

私たちって実は、馬鹿なんじゃないかって—————そう思う時があるのよ』

あの夜に聴いた遠坂凜の独白を、士郎は一生忘れられないと思う。

魔術師って大変なんだな。

俺はまだ未熟者だから分からないけど、苦労も多いんだらうな。

素直な良い子の士郎は、そう思うのだった。

入れたまま、朝。

「おはようセイバー。よく眠れたか？」

翌朝。目が覚めた士郎は顔を洗い、その足でセイバーを探して道場にやってきた。

ちなみに昨夜のバーサーカーとの闘いは、なんかうやむやのまま幕を閉じてしまったと思う。

でもイリヤとはしつかりメアドも交換したので、今後は連絡を取り合う事が出来る。お互いマスター同士だし、またすぐ会う機会もあるだろう。

「お、おおおはようございませすシロウ。良い朝ですな……」

道場の真ん中あたりに座り、静かに目を閉じて精神統一をしていたセイバーが、挨拶を返す。

スカートを穿いているし、士郎は気づいていなかったのだが、セイバーのしているのは正座ではなく、ペタンという女の子座り。

しかも精神統一ではなく、頬を赤く染めて何かに耐えていた、というだけだった。

「なんとかか……なんとか10分ほどは、眠る事が出来ました。

しかし、少し良くない夢を見てしまうので、もう起きている事にしたのです……」

そう小声で告げた後、セイバーは士郎の顔を見ている事が出来ず、恥ずかしそうにパイツと目を逸らす。

「いったい彼女は、どんな夢を見たのだろうか？」

赤いリンゴみたいになってしまった顔は、こちらからは伺えなかった。

「そうか、じゃあ今日は無理せういこう。」

別に眠くなったら、寝てても良いんだからな？」

「いえ、ご心配なく……。本来サーヴァントに、睡眠は必要ありませんから。」

「……それよりも、シロウ……」

セイバーが士郎の方に、「ん！」っと両手を差し出す。
愛らしい上目遣いの瞳、恥ずかしそうな顔で。

「あはは。分かったよセイバー、ほら掴まりな？」

「ありがとうございます。」

申し訳ありません……ご主人様^{マスター}」

その手を取り、よいしょと立ち上がらせてやる。優しく気遣ってあげながら。

セイバーは士郎の腕にギュツとしがみつき、内股でブルブルと震えている。もう今にも腰が抜けてしまいそうな様子だ。

「良いんだよ、じゃあ居間に行って朝飯にしようか。」

ほらセイバー、いっちに。いっちに」

「いっちに、いっちに。……んっ……んっ……♡」

まるで子犬のように震え、コアラのようにギュツとしがみつくとセイバー。

その様子に微笑ましさを感じ、士郎は優しく寄り添いながら、ゆっくり歩くのだった。

……………

お箸を持つ手がガクガクと震え、お茶碗から味噌汁がビチャビチャーツと飛び散る、そんな朝食後。

玄関からピンポンと音が鳴り、いつもより少し遅れた時間で、桜がやって来た。

「せっ……せんぱい！ 誰ですかその女の人は!？」

そして目撃する、想い人の腕にぎゅぐゅと抱き着く女。

フルフルと震える小動物みたいな、強烈に庇護欲をそそる金髪の少女。

妹キャラである自身の遙か上をいく、「この子は俺が守ってやらなきや」感に溢れた、女性サーヴァント。

(そんな……?! せんぱいはおっぱいが好きだとばかり思ってたのに

!

呼び出すのが巨乳のサヴァアなら、なんとか私でも対抗できるって、そう思ってたのに！

まさか、こんなにも儂げでちっちゃい子を、呼び出すなんて……！）
まさに「ガーン！」といった顔で、目をひん剥いて土郎たちを見る。
桜はあわわと慌てながらも、ビシツと指を突き付けて、断固抗議の構えだ。

「いけないですよ！ せんぱい！

いくら一人暮らしだからって、家に女の子を連れ込んだじゃ、いけないですっ！

さあ、いますぐ帰ってもらってくださいっ！ 犯罪になっちゃうんだからっ！」

「いや桜……これにはちよつと事情があつてさ？

この子は爺さんの知り合いで、わざわざ外国から来てくれた子なんだよ。

大切なお客さんだし、そんな事できないだろ？ 分かってくれ桜」

「そっ！ ……うっ！」

そんなの嘘だつて知っている。土郎の手の甲には、今も令呪が赤く光ってるんだから。

でもそんな優しい顔で諭されると、言葉に詰まってしまう。

だいすきな人にニコツて笑いかけられたら、何も言えなくなってしまうのだ。

ああせんぱい今日もカッコいい。やさしい。ステキングです♪

(っ！ そうだわ!!)

——その時、桜の脳裏に電流が走る。

「あーっ！ なんかその人、ふるふるしてませんか!?

もしかしてせんぱい、何かしてるんじゃないんですかっ!?

「!?!?!」

「!?!?!」

「いーけないんだー♪ いけないんだー♪ 国家権力に言ってやろー

♪

せんぱいのえっちー！」

——いける！ これならいけるツ!!

あの道具を付けている事を逆手に取り、ここから追い出す事が出来るツ！

桜はこの土壇場での天才的なひらめきに感謝する。よくやった私と。

「さあー やましい事がないならスカート脱いでください！ みせる事ができるハズです！

そうじゃなきや、ここから出て行ってくださいっ！

このどろぼうネコ！ 痴女っ！」

「やー！ やめなさい！ スカートを引っ張ってはっ……!!？」

「おい!? こら桜ー！」

えーいとばかりに引つ張り、無理やり脱がそうとする。

ついでに「痴女め！」という言葉で、恋敵の好感度も下げてみる。

うん。今日ホント冴えています、私。

「あー……。ごめんな衛宮、来るのが遅れたよ。

ほら桜！ 迷惑かけんな！ 離れろっ！」

「し、慎二っ!？」

慎二に引き剥がされ、「むきやー！」と叫びをあげて桜が離れていく。セイバーは危機一髪のところ助かったのだ。

「こういう事になるかもって、いちおう来てみたら案の定だよ……。

悪かったね衛宮。別にこいつも悪いヤツじゃないんだけどさ？

まあ勘弁しやってよ」

「ああ、分かってるよ慎二。来てくれて助かった」

親友同士のキラキラした光景を、桜は「ぐむむ……!？」と睨みつけるばかり。

何その仲の良さ、分かりあってる感じ。

私せんぱいにそんな顔された事ないです。くちおしやくみみたいな表情だ。

「ほら帰るぞ桜！ 帰りにパン屋で好きなもの買ってやるから！ ほらっ！」

「やーです兄さん！ やーです！

いくらあんばんやハムサンドを積まれても、これはまかり通りませえーん！」

最近の桜は、だんだんワガママというか、幼くなっているような気がする。

頼りがいのある兄を信頼してか、まるで子供みたいにワーワー騒ぐのだ。

可愛いから良いけども。

「勝負ですせんぱい！ こうなつたら聖杯戦争で決着をつけますっ！

——— つてことでライダー!!」

その声に応え、この場に90年代のボディコンスーツのような黒い服に身を包んだ女性が、スカートの前を押えて内股の状態で現れる。文字にすれば「くっツツ!!」みたいな表情をしたライダーは、戦う前からもう、崩れ落ちそうに見える。

「ちよー… なに考えてんだよ桜！

こんな朝つぱらから『アーン!』とか『おほーう!』とかやるつもりか!」

「しゃらっぶです！ 兄さんはちよつと黙っててください！

戦いに口は出さないーって、約束したじゃないですか!」

「そ……そうは言つてもさ？ 拙いだろコレ？

衛宮が困つちまうだろ……」

朝つぱら、それもこんな住宅地で聖杯戦争をやれば、その声はご近所中に響き渡る事だろう。土郎がお隣さんからよからぬ目でみられる事は必至。

下手すれば通報されるかもしれない。

「さあ行きましょうせんぱい！ 聖杯戦争のお時間です！

私が勝つたら、その人には帰ってもらつてください！

あと私を『えらいね』つていい子いい子してください！ ハムサンドも買つてください！」

そう言い捨て、「ふんす！」とズンズン庭へ歩いて行く。

そんな桜の背中を、内股でチョコチョコと歩くライダーが追いか

て行った。

.....

.....

「良いんだなセイバー？ ……それじゃあ押すぞ。ポチツと」

「ひいひい〜ん!!!」

いまこの場には、二体の女性サーヴァントが揃い踏みしている。

どちらもスカートの前をおさえ、モジモジと膝をこすり合わせているけれど、その魔力は圧倒的だ。

そしてセイバーは士郎に頼み、例の機械のスイッチを押しさせる。

戦う時は必ず押さなければならぬルールなので、恥ずかしいけどご主人様マスターにお願いした。

うるうる潤んだ目で「やさしくして下さい……」と付け加えて。

それによりセイバーの身体を、さつきとは比べ物にならない程の刺激が襲う。

身体はビーンとそり返り、瞳孔は開き、言葉にならない声を上げる。思わず士郎の胸にギュツとしがみ付くが、このあと戦いに行かなくちゃいけないのだ。どうしても一人で歩かないといけない。

「よーし♪ それじゃあやるよライダー♪ ええーい！」

『————アヘアアアアアアアアアアアーツ☆☆☆☆』

桜もボタンを押し込み、ライダーがとんでもない声を出す。

セイバーとは違い、舌を出して喜んでいるようにも見えない。犬か何かのように。

「がんばれセイバー。負けるんじゃないぞー！」

「しよー！ 承知しましたご主人様マスター！

我が剣は、貴方と共にあるうー→」

「さあいこうライダー♪ 特訓の成果をみせよう♪」

「おほおおおああっ!! こんなオモチャなんかにはいいいいーっっ!!」

……こ、これしゅごツ！ コレっすごういひ〜んっ☆

こんな初めですううううううううっ!!!
内股ぎみで立つ女性二人が、衛宮家の庭で向かう合う。
マスター二人が手に汗を握って見守る中、セイバーvsライダーの
戦いの幕が上がる。

「いぎ征かん! ——シロウ!」

「わかったよセイバー! うおおポチポチポチ!」

「んいいい~~~~♡」

士郎が手元のボタンを連打する。その度にセイバーの身体に力が
漲り、あとちよつと身体がクネったりもする。

「しゃ……しゃくらっ!! しゃくらあああああ☆☆」

「なになにライダー? ……あ、押せて事かな? えーい♪」

『————へヒひいイイイイイインツ!!?!』

ライダーにも魔力が注ぎ込まれ、その身体がビクンと波打つ。あと
眼帯の奥では白目も剥いている。

「まま……! まだまだあ! シローウ!」

「よしきたセイバー! そりやあー!」

「にやあああん! (はあと)」

膝をガクガクーツとさせて、セイバーが艶声を上げる。

そしてすごく潤んだ目で士郎を見つめる。色っほい表情で。

「……いい、いいいい、ひぐぐぐつ……!!」

アガツ……アググツ、アア……あうあう……!!」

「どうしたのライダー?」

あ、もう一回かな? そーれ♪」

『————ンいぎイイイイイイン!!?!??』

あおおおお……ッ! イッツコッ!アッアッアッ——ッ!!!!

』

ブリッジの態勢で、ライダーがへピョーン!と飛び上がった。

「どうしたのれすライダー!」

あにやたのご主人様への忠義は、そんな物れしゆか!」

「だつ、黙りなしゃいセイバー! まりやまりやイケまひゆ私は!

さあ早くかかっとうう~~~~♡

んあーっ！ これしゅっごいのおーう!! (≡∩≡)

関係ないが、さつきからボタンを押してばかりで、ぜんぜん戦っていないような気がする。

此度の第五次聖杯戦争は、これまでとは少し趣が違ふようだ。

「いけないっ！ このままでは負けてしまう！」

——— サクラ！ 宝具の使用許可を！」

「いいよライダー！ …… どんどんいっちゃってー♪」

何をもってそう思ったのかは不明だが、己の劣勢を悟ったライダーが「ぴゅいー♪」と指笛を吹き、空からペガサスと呼び寄せる。

首から血を出したりしなくても、意外と呼べるようだ。

「こうなったら、空から攻撃でふ！」

ペガサスに乗って、一方的に倒しまふ！」

語尾は少し怪しいが、いまライダーがペガサスに手綱をかけ、勢いよくその背中に乗り込んでんぞ！

『——— ツツツツ?!?!?』

するとどうだ！ 何故かライダーが身体を仰け反らせ、とつぜん天を仰いだではないか！

ペガサスにまたがったその途端、彼女は瞳孔を開き「あーっ!!」と絶叫する！

「ちよ………！ 待ちなさい我が子よ！」

あっ！ ダメ！ 歩いてはなりませんっ！ れちやうかりやあ！」

ライダーを乗せてパカパカとあるくペガサスさん。だがその背に乗ったライダーは、慌てて手をワチャワチャと動かしている。

そして何とかペガサスの背から腰を浮かせようと、必死にもがいているのが見て取れた。

「——— 喰い込む！ 喰い込むのですッ！」

何とは言えませんが……ペガサスの背で、すごく喰い込むのですッ!!

ペガサスが機嫌よくパカパカと歩く度、悶絶するライダー。

乗馬の振動が伝わる度に、なんか「あうっ?!」とか「いやんっ?!」とか叫んでいる。

『そんなツ……?! 我が子に!? 我が子にしゃれりゆだなんてツツ
!!!!
でもコレおほおおーっ♪ ば、ばんじゃ〜い☆ 聖杯戦争ばん
じゃ〜い☆

——ふおおお!! ベベベ……べるれふおおく〜ん♡♡

♡ (意味深) ♪

クラツと傾き、ペガサスの背中からドテーンと落馬するライダー。

——戦いは終わった。士郎とセイバーは、第二戦でも見事勝利を勝ち取ったのだ。

ライダーが勝手に乗り、勝手に倒れたような気もするが、勝ちも勝ちなのだ。

「よお桜、あれお前のサーヴァントなんだって?」

よく躡けてあるじやないか。さすが魔術師だな」

「……」

ニカツとさわやかに笑う慎二が、ポンと桜の肩に触れる。

彼女の方はもう、無言で佇むばかり。

「やりましたねシロウ! 我らの勝利でしゅ!

私たちは試練を乗り越え、敵に打ち勝ったのにや!

「お、おう」

もう呂律が回らなくなっているセイバーを抱き留め、優しく身体を支えてやる。

まあその後すぐに「あん♡ ……ご、ごめんなさい! ドンタッチミー!」とか言つて、セイバーは離れたけれど。

とにかく聖杯戦争の第二戦は幕を下ろし、士郎に付き添われたセイバーが、家へと歩いてイッた行った。

入れたまま、説教。

「——こりや桜！ ライダーをいじめてはイカン！」

間桐家のリビングに、お爺ちゃんの雷が落ちた。

「たしかに間桐の魔術は、こういう物ではあるが……それでも『人の道』という物があるのじゃ」

床に正座させられ、ショボンと俯いている桜。そのすぐ前に立ち、間桐臓硯が孫への説教をおこなう。

「無抵抗の者を拷問したり……！ 思うがままに操ったり……！

拳句の果てに、他人を犠牲にしてまで生き延びようとするなど、もつての他じゃ！

——そんなの鬼畜の所業じゃ!! 吐き気がするツ!!」

なぜか慎二の脳裏に「お前が言うな」という言葉が浮かんだが、口を出す事なく静かに見守っていく。

「いくら魔術師とはいえ……良識や思いやりという物を、決して忘れてはならんぞ？」

良いな桜？」

「はい……おじい様の言う通りです。ごめんなさいおじい様……」

あのセイバーとの戦いの後、慎二に叱られたばかりか、臓硯にまで怒られる。

いま桜は、これまでライダーにしてきた所業が全てバレてしまい、お説教を受けているのだった。

「お主に悪気が無かった事は、この爺も分かっておるんじやよ。

お主はとても頑張り屋さんじゃし、自分なりに精一杯、聖杯戦争を戦っておったという事もの。

しかし、今回は少しだけ……やりすぎてしまったの？

これを良き教訓とし、これからもライダーと共に、頑張るんじやぞ？」

「はい、ありがとうございますございませすおじい様♪ 私これからもがんばりませす♪」

優しく言っただけ聞かせ、暖かな笑みで見つめる。

桜もニツコリと笑顔を返し、素直に納得してくれた事が伺えた。

そもそも桜は、本来とても良い子なのだ。

こうしてすっかりと言ひ聞かせれば、ちゃんと理解出来る賢さも持ち合わせている。

過剰に怒鳴りつけたりしなくても、この子は分かってくれる。心配はいらないのだ。

それを知っている間桐臓硯も、親としての愛と信頼をもって、桜と接している。

「ライダーや？ 此度の聖杯戦争は、今までとは比べ物にならぬ程、過酷な条件の物じゃ。

だがこれも、冬木市の皆様の平穩の為。何より命を守る為。

辛いじやろうがそう理解し、これからも励めよ？」

「承知しましたゾウケン。おまかせ下さささい」

語尾は怪しくなったものの、ライダーもしっかりと頷きを返し、まっすぐに臓硯を見つめる。

内股で、膝はガクガクしているけれど、それは今は見ない事としよう。

「慎二もすまんかったの。ありがとうの。」

聖杯戦争の事はともかくとしても……これからも良き兄として、桜を支えてやっておくれ」

「分かっているよ爺さん。何とかやってくさ。」

これでも桜の兄貴なんだ。魔術回路なんか無くてもね」

そう締めくくって、間桐家の面々は食堂へと移動する。

今日の晩御飯は、桜&慎二特製のビーフシチューだ。

この話し合いの間もしっかり煮込んでいたので、さぞとんでもなく美味しい事だろう。今から楽しみである。

「……でも爺さんさ？ それ入れたまま説教するのって、どうなのかな？」

「いやいや慎二よ、他人に使おうという以上、こうして己で試してみるのも大切じゃぞ？」

「正直、説得力が皆無だよ。」

コイツそんなの入れながら何いつてんだ？ って話なんだよ」

くおわりく